



新入社員セミナー

第一部 コミュニケーションの重要性 第二部 より多くのことを達成するために

2019年4月17日、春からIT業界の一員となった新入社員を対象に、社会人としてのアドバイスや業界の展望をお伝えする「新入社員セミナー」が文京シビック大ホールで行われた。会員企業34社から参加があり、今回も大規模な開催となった。



一般社団法人
日本コンピュータシステム販売店協会
大塚 裕司 会長

「最新のことを勉強しながら、自分自身が成長でき、さらにお客様に喜んでもらえるのがIT業界の仕事。この業界に誇りを持ってるように頑張ってください」とJCSSA会長の大塚裕司氏が開会の挨拶を行った。

コミュニケーションの重要性

株式会社バンネーションズ・コンサルティング・グループ
代表取締役 安田 正氏



強みを見出し、 仕事の楽しさにつなげる

仕事を通じて成長できる人がいれば、できない人もいと安田氏は話す。成長できる人は仕事を楽しめ、好循環が生まれる。どうしたらそうなれるのだろうか。

まずは、自分の強みを発見して生かすこと、他人から評価されることが大切だという。自分の強みを言える新入社員はすでに多いかもしれないが、強みを言えるだけでは十分ではない。自分の強みは職場でどう生かせるのか考えるとともに、自分では意識していない強みに気づく必要があると安田氏は話す。

また、他人からの評価も重要だ。ビジネスの場面ではコミュニケーション能力が重要視されるが、初対面の相手に好印象を抱いてもらうにはコツがいるという。安田氏は「メラビアンの法則」を紹介した。これは話し手が聞き手に与える影響を研究・実験し数値化したもので、法則によれば人の印象には、視覚情報55%、聴覚情報38%、言語情報7%の割合で影響がある。つまり同じ内容を話すのでも、表情やしぐさ、声によって印象が左右される。セミナー会場では、実際に新入社員が壇上で自己紹介し、安田氏がアドバイスした。結果、会場から拍手となって反応が返ってくる、好印象の自己紹介となった。コツを掴んで少し意識を変えるだけで、成果につながる。



①表情は口角を上げ、少し歯を見せるくらいに笑い、目つきをにこやかな三日月にすること、②声はいつもより高めを意識し、「ファ」「ソ」の高さにすること、の2点を意識してもらった。

28歳までの頑張りが その後の可能性を拓いていく

社会人スタートの時期は基礎作りの期間でもあるが、仕事に対する意識が変わる28歳までが重要な時間で、この期間の頑張りが後の成長に大きく関わると安田氏は言う。28歳は一生懸命に打ち込むことで、仕事への興味が高まり、お金のための仕事から、仕事そのものの面白みが感じられるようになる年齢で、それまで培ってきた基礎力が、強みとして芽吹くタイミングだという。

安田氏は、人の成長をグラフ化したとき、成長し続け上昇曲線を描ける人と、残念ながら停滞したまま平行線をたどる人がいると言い、新入社員の時点での実力は同じだとしても、努力の積み重ねで差が生まれ、後から振り返ると見える景色がまるで違ってくと語った。成長を止めないために、今日できなかったことを次には少しでもできるようにする心掛けが重要だ。

これから発揮される才能・強みのためにも、めげないでほしいと安田氏。「可能性を信じてぜひ頑張ってください」と鼓舞して講演を終了した。



より多くのことを 達成するために

日本マイクロソフト株式会社
代表取締役社長 平野 拓也 氏



探求をやめない姿勢 「グロース・マインドセット」 が重要

成功を収めたいと日々思っている人は多いだろう。新入社員となれば気合いもひとしおだ。目標を達成するために、大切なのはどんなことなのか。

平野氏は、重要な考え方として、まず「グロース・マインドセット」をあげる。これは、それまでの実績にとどまることなく、過去を超える考え方を見つけ、どこまでも探求していく向上心のことだ。学校では、正しい答えを出すことにエネルギーが費やされてきたが、それでは定められた以上の成果は望めない。新入社員は、先輩から仕事のやり方や作法を学ぶ際、前例のままですべて終わってしまうのではなく、「あれもできるんじゃないか」「これもできるんじゃないか」

と、拡張していく姿勢が大切だと平野氏は述べる。

並んで重要なのが「コンフォート・ゾーンからの脱却」だという。これは、居心地の悪いところへ自ら進んでいく意識を持つことだ。入社当初は緊張やいら立ちを感じるだろうが、慣れると居心地が良くなっていく。慣れた状態で挑戦をやめるのではなく、自分から殻を破って居心地の悪いところへ進んでいく生き方をしてほしいと平野氏。居心地の悪さを求めることは、グロース・マインドセットにつながる」と話した。

講演では、グロース・マインドセットによって達成された、マイクロソフト社の事例も紹介された。新開発された機器は、文字情報も人の表情も読み取り、認識できる。これを使って、目が見えないがコーディングをして働く男性の話など、過去の実績にとどまらず、新たな結果を追い求めて成し遂げられた好例が話された。

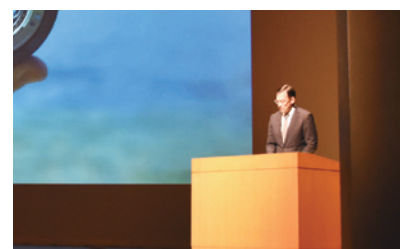
「何をもって達成とするか」 を考え、テクノロジーで 可能性を切り拓く

意識を変えることだけではなく、テクノロジーによって達成できることも増える。平野氏は、一例としてマイクロソフト社の「インテリジェントクラウド」と「インテリジェントエッジ」を組み合わせる考え方を紹介した。高い情

報処理能力を持ったクラウドとデバイスを連携させることで、いつでもどこでも仕事ができるコネクテッドワークが可能となり、街や家のセキュリティは向上する。他にも、医療、移動手段、建築・工業デザインなど産業から暮らし方まで、様々な分野で可能性の幅が広がるという。

技術革新が進む一方で、日々進化するAI分野には新たな課題も生まれているという。平野氏は、アメリカで行われた教育プログラムの例をあげ、「人間の思考のバイアスでAIの動作が偏り、悪影響を与えた」と述べる。AIは、画像・音声の認識、文章読解、翻訳において人間と同等もしくはそれ以上の能力を持つという。高い能力を備えるようになった以上、AIに「どこまで・何をさせるか」を考える必要があると警告する。IT業界でビジネスをする上では、テクノロジーで「何を達成するか?」「社会をどう変えるか?」を考えてほしいと平野氏。

「今後みなさんが社会においてより大きく成長され、多くのことを達成し、パーソナルライフにおいても大きな成功を収めることを心からお祈りいたします」と語り、講演を終えた。



▲講演をする平野氏